「言葉に躓く経験、あるいは生き残るということ　書評 岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』」
『図書新聞』2509号、2000年11月11日

寄稿

言葉に躓く経験、あるいは生き残るということ

物語への抵抗、ないしはテキストに穿たれた傷痕に寄り添う姿勢

稲賀繁美

『彼女の「正しい」名前とは何か』

柳原和子著『がん患者学』を読む

おそらく著者ほど、「日本人」であることの罪悪性を鋭く自らに突き付けながら、日本語でそれを摘出しようとする思索者は、今日のこの国にまたとあるまい。その軌跡は、矛盾や揺らぎを含みながら、ここに深い傷と、詩的な彫琢を宿した作品を産み落とした。それをいかに読むか、には大きな応答＝責任が課せられている。だが、いざその大切な作業を課すと、評者はかえって自らの不適格性が暴露されるような、居心地の悪さと罪障感に苛まれる。レバノン危機下の1983年、エジプトからイスラエルへと、ひとり陸路国境を越えてゆくなら、評者はそこでパレスチナと「出会い損ね」（本書冒頭）る経験にすら、直面し損なったのだから。

最初に教科書的な確認をしておこう。著者が一貫して批判すること。それはまず「西欧」の（フェミニズムをも含む）認識主体が、「第三世界」を「犠牲者」と同値に定義することで、認識操作の対象として認知しつつ切り詰め、またそのことによって認識主体自らの「同情」の正当性と正義を言い募るばかりか、それを「第三世界」へと強要しようとする不遜な暴力。ついでそうした暴力――植民地主義の権力的上下関係の象徴的次元への置換による温存――を無批判に輸入・内在化して反復することを、国際正義への貢献と取り違える、この国の知的土壌。さらにこれらの複合として、「第三世界」への無意識な蔑視――という隠微な支配体制――が、自らの無知を知らない二重の無知ゆえ、報道を通じてかえって隠蔽され（"Covering women"）、結果として父権的抑圧に加担する実態。「女性器切除」問題をめぐる言説が、かえって当事者たちの発言そのものを「切除」し、イスラームに「抑圧」を見る偏見が、むしろ現地における抑圧を助長してきたことを、著者は90年代を通して、執拗かつ鋭利に指摘しつづけてきた。

だがこうした要約を著者の思索から抽出することに、さして意味はあるまい。著者を多くの理論家たちから隔てるのは、自らの体験を反芻する鋭敏な皮膚感覚と、作品を特定イデオロギーやプロパガンダの媒体へと還元する誘惑を退ける柔軟な思考。そしてとりわけ、自らの情緒を、安易に犠牲者のそれと同調させて、正義の代弁者を演ずるようなナルシスティックな自己正当化を、頑なまでに自らに禁じる禁欲的姿勢だろう。むしろ著者に特徴的なのは、あたかも真実の、そして正義の代弁人であるかのように振る舞う姿勢を背後から支える権力関係への、透徹した批判だろう。それは著者自身に、特権的な視点を約束しながら、その特権に胡座をかく姿勢を禁じる。その精緻な論理にもかかわらず、声高の演説は極力回避され、作品の細部や会話の余白に取り残された沈黙のなかに、問題の焦点が見据えられる。

他者をあたかも自らのように語る、という横領・簒奪と虚偽なくしては、代弁は不可能だ。と同時に、当事者にしか発言権はない、とする見解は、当事者を暴力的に決定する遂行的政治過程と裏腹だ。この狭間にあって、語らぬ者たちは、語り得ぬだけではなく、代理して語られることに傷つき、脅え、代行された語りを拒絶する存在だ。そして意見表明はときに告白を強要される拷問ともなる。だが語らない彼／女らは不可視のままどこにでも遍在し、加害者――語る者――に思わぬ不意打ちを食らわせて、絶句させる（西成彦）。それが「他者」の出現であり、そこに思わず表明される抵抗に、「文化」がその姿を垣間見せる（徐京植）。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を告発しながら、南アフリカの白人作家、クッツェーが

描いた、舌を抜かれたフライデーの無言の口が、そこにぽっかりと深淵を覗かせる。真実は表象不能だが、それは物語によって代行される（これは定義である）。定義からして物語は虚偽でしかないが、その虚偽が人々を辛うじて狂気からも救う。とすれば（これは評者の見解だが）、虚偽を拒絶できるのは強者の証しともなろう。逆に、ひたすら自らの正義を言い募る『ホスケン・リポート』やアリス・ウォーカーの『喜びの秘密』、そしてメロドラマ仕立ての『シンドラーのリスト』の「虚偽」は、かえって彼／女らの弱さ、また彼／女らの／に依存する「自由世界」や「国際機関」、さらにイスラエル国家理念の、精神的脆弱さを露呈しているとはいえまいか。

こうしてテクストの、そして政治状況への批判的再検討は、関与した作家と読者たちとの関係性そのものを「創りなおす」契機へと著者を導く。そのための苛酷かつ最適な観察臨界が、パレスチナあるいは在日という、究極の「宙づり」状態から提供されるのも必然だ（だがその弱者の立場に立つことは、逆説的にもその場からの発言者に、精神的な強者となることを必要条件として要求する）。文化が定義からして暴力であることを受け入れたうえで、自らの存在と骨がらみの加害者性を、文化英雄としての居直りから切り離し、被害者の痛みを共有できないことの痛みを共有しながら、自らの無感覚にたいする抵抗を組織すること。ここで「解放」とは、けっしてある日実現できる何物かではなく、むしろ不断に自らの無知に気づき、不明を恥じる負傷の対価として与えられるものだろう。それは、永遠に未完成かつ不完全な認識を覆う、無数の皮膜を、一枚一枚と引き裂き続ける営みだろう。

本書は、知識による理論武装を無条件に是認するような態度、さらには知ることは善だとみなす知の性善説に対する、容赦ない異議申し立てとして、日本語で書かれた知性史に、深く刻まれた跡を残すことだろう。それを書評の対象へと還元することがいかなる暴力の行使であるかに無自覚な書評は、否応無く著者を傷つけ、翻って書評を綴る側にも、癒されぬ傷の記憶を負わせることだろう。だが傷つけあうこともない相互理解など、理解の名に値しうるだろうか、と著者は問う。誤解でない理解は理解とは認知できず、誤配でない伝達などない――しかしそれは誤解がまかり通り、誤配が許容されることを意味しない――人はただ、誤解に気づき、誤配を受け入れることから、辛うじて何か（の過ち）を学ぶ機会も与えられる。

侵害と無縁な知の営み、などといった安全地帯に立てこもる態度の偽善性を、著者は執拗かつ鋭利に暴く。だが、その解剖には痛みが伴う。そして、その痛みを自らの痛みとして引き受け得ない無力さに、著者自らはさらに傷つき、そしてその傷の痛みに、読者ひとりひとりがさらに傷つく。声高な告発や正当性の主張は、おうおうに人を傷つける。だが、人を傷つけまいとする配慮が、事なかれ主義となって、かえって人に深い傷を負わす。とはいえ、自らの負った傷を見せびらかしても、そんなナルチシズムが、無罪証明となるわけではない。お涙頂戴の紋切り型がもたらすカタルシスも、悲しみの欺瞞的共有によって語り得ぬ真実を隠蔽する逃避行為として、拒絶される。知ることは自分の無知を暴かれることと裏腹であり、理解とはみずからの不明を悟ることに等しい――それが、評者がこの本から学びえたことだ。自らの無知、そして無力を知る苦痛――それを読者は著者と分け持つ。痛みに応答responseする責任responsabilityが、さらなる知を要求する。こうして知は受苦＝情熱passionとなる。

案の定、本書の具体的な分析の美しさの一端なりとも掬い上げ、その瞠目すべき論理の行間を示唆することもままならぬ、凡庸かつこちたき評となった。まだ、言わねばならぬことの、入り口にも達していない。遅延を重ねるほかない評者の「応答」は、場所を改め、著者のもう一冊の、薄いが重い本、『記憶／物語』に投げかけたい。

（国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学）